

読んで考えるトラブル対応シミュレーション  
人事労務の  
リスク管理メモ

いま職場で起こっているリアルなトラブル事例集

2020年 3月号

正社員になりたいければ...

A課長が口を開けば、二言目に出てくるお決まり文句。契約社員の立場に長年甘んじているBにとって、正社員は念願だった。課長がAに変わった当初は、

「君が契約社員のままでいいもったいない。俺が正社員に押しやる」

「こうすると正社員になれる」

「これもやれば、正社員間違いなし」などと、具体的な指示をくれるので、ようやく正社員になれるか、などと淡い期待をしていたが、それから何年たっても、正社員の話など微塵も出て来ない。それもそのはず、何のことは無い、すべてはA課長の方だった。

「正社員になれると言えば、Bはなんでもやるよ。馬鹿なヤツだね」

Bのいない職場で、Aの独り言を同僚たちは、Bは仕事ができるから、良いように使われている、などと苦々しい思いで聞いていた。その中には、Bと同じ契約社員のCもいた。

Bもそんなことは薄々分かっていたが、「正社員...」と言われると、二の句が継げない自分にもどかしさを感じていた。でも、与えられる仕事があるということは、私の能力をA課長が認めているということだ、と自分に言い聞かせ、淡々と日々の仕事をこなしていた。それができたのは、B自身でも、仕事が苦ではなかったからだ。

そんなある日、A課長は人事のD部長と、Bのについて、話をしていた。

「Bはそろそろ5年になるか...」

「使い勝手のいい奴です...」

「...それ、どういう意味？聞きようによっては問題になるよ」

「じょ、冗談じゃないですよ。言葉の綾です、言葉の綾...」

「無期転換を行使すれば、事実上正社員と変わらないからな...」

「えっ、本当に正社員にする...」

「しなくても、無期になるのは確定だ。それなら正社員にした方が...」

「...そうですか...」

「なんだよ、残念そうだな...何で？」

「いや...もともと能力もありますし、本人も、その...」

「正社員になりたい、って言ってるの？」

「え...まあ、そんなような...」

「あ、そう。じゃ、今度本人聞いてみるか...」

「えっ...あつ、そんなんですね」

しどろもどろのA課長に、D人事部長は上目遣いでギョと一瞥した。

「何か、都合の悪

いことでも？」

「そ、そんな...都合が悪いなんて...」

「使い勝手のいい奴、だっけ？」

「...」

「いいかげん、解放してあげたら...」

「ど、どういう意味でしょう」

「それ、言わせるの？」

「...」

「見てる人は、見てるんだよね」

Bに対する「正社員...」をダシにした無理難題の丸投げを、B部長がどこまで知っているのか、A課長は疑心暗鬼になってきた。Bは、D部長に何をチクリやがったのか...屈辱に顔を歪めながら、Aは職場に戻った。

「B、ちょっといいか...」

会議室に呼ばれると、いつもおちゃらけのA課長とは様子が違うことに、Bは気が付いた。

「俺に恨みでもあるのか？」

無いわけないだろ、とBはのど元まで出かかった。

「...」

「何で黙ってるんだよ」

「何のお話でしょうか？」

「何でお前を呼んだか、分かっているだろ」

「また、正社員にするから、なんかしろ、ですか」

「それなら会議室なんか呼ばないよ。お前、D人事部長に話をしただろ？」

「え、D人事部長、ですか...」

「何を話した？」

「何も、話していませんが...」

「とぼけるな！俺が正社員をダシにお前をこき使っている、とかなんとか言ったんだろ？」

「ふーん、自覚があったんだ」

「貴様...」

「でも、私は人事部長になんて、会ってません」

「今さらとぼける必要なんかないだろ」

「とぼけるも、何も、私、人事部長に本当に会ってませんので」

「じゃ、誰がチクったんだよ」

「そんなこと、私が知るわけじゃないですか。そんなに気になるなら、直接人事部長に聞いてみたらどうですか？」

そりゃそうだ、とA課長は思ったが、それをBに突っ込まれて、反論もしないで納得している自分に、無性に腹が立った。「くそっ」

実はA課長はD人事部長が苦手だった。とぼけたような人を見たような言いぐさは、何を考えているのか、さっぱりわからない。そんなD部長に、

「誰から聞いたんですか？」

なんて聞いたところで、煙に巻かれるだけかもしれない。が、...

「D部長、Bのことですが、あれは、だれから...？」

「誰だと思う？」

分からないから、聞いてるんだよ！とAは心の中で叫んだ。

「まさか、直接Bを吊上げてたりして...」

「ゲッ...」

「凶星らしいね」

「...」

「残念ながら、Bじゃないよ」

「じゃあ、誰が...」

「そんなに気になるの？」

「いや、そういう訳では...」

「誰か分かったら、またそいつを吊し上げるんだ...」

「ち、違います、誤解です」

「言える訳ないよね。これ以上被害者が増えたら会社の問題だから」

「...」

「そろそろ、自分の仕事とまともに向き合ったら...」

「そんな...D部長は何か大きな勘違いを...」

「...してるって？そうかな...」

「そうです、そうです」

「ふーん...まあ、いいや。ところでね、お前に頼みたいことがあるんだけど...」

「よ、喜んでお引き受けします！」

「あのね、Bに、無期転換権の行使の手続きと、正社員への意向を確認してくれない？」

「は、は、はい...」

これは踏み絵だ、とA課長は思った。俺にやましいところがなければ、素直にBを正社員するはずだよ、という脅しだ。外堀は埋められてるらしいと感じたAは、どちらにしてもBが正社員になるなら、下手なことをして自分の失点になるようなことはすべきじゃないだろう、というAらしからぬ冷静な判断で、D部長からの依頼を素直に応じることにした。

翌朝、Bが出社すると、早速A課長は会議室へ呼び出した。憂鬱な一日のスタートだ、とBはため息をつきながら会議室のドアを開けた。

「これ、D人事部長から...」

Aは魂の抜けたような声で、机の上に置かれた書面を指さすと、そそくさと会議室から出て行ってしまった。A課長にとってはこれが精一杯だった。

Bは、目の前に置かれた書類が一体何か、瞬時に分からなかったが、書類をめくりながら、満面の笑みがこぼれていた。

「よかったね。ようやく...」  
「ありがとう...みんながいたから...」  
職場に戻ったBは同僚たちに感謝の気持ちを抱えていたが、その中でただ一人、浮かない顔をしている同僚がいた。  
「何で...私の方が先輩なのに...」  
同じ契約社員でBより1年先輩のCは、Bのよき理解者だった。仕事をテキパキと要領よくこなすBとは対照的に、物静かな、どちらかというと、おっとりしたタイプで、年齢もBより年下だったこともあって、職場でもBの陰であまり目立たない存在だった。実は、Bに対するA課長の「馬鹿なヤツ」という言葉に、自分自身を思わず重ね合わせてしまったCが、思い余ってD人事部長に、職場の様子をつまびらかにしたのだった。  
「私がBを正社員にしたってこと？」  
釈然としないCの隣の席に、Bが座った。今日も仕事を山ほど抱えているBは、隣のCの表情など、気にする余裕もない。バタバタしていたBが脇に置いてあるゴミ箱を、うっかり倒してしまった。  
「Cちゃん、ごめんね」  
「...」  
あれ、とこの時初めてBは思った。Cの様子が変だ。おかしい、と感じたBはもう一度声をかけてみる。  
「Cちゃん、ゴメン...」  
「...」  
これは明らかにおかしい。何があったのか。どうやらBとCの二人の間の微妙な空気を、周りの同僚たちもなんとなく感じている。Bは散らかってしまったゴミをゴミ箱に戻すと、仕事の続きを始めたが、どこか気もそぞろだった。そんな様子を遠くから静かに眺めながら、A課長はほくそ笑んだ。  
「Cの気持ちは分かるよ」  
「...」  
「Bは君を差し置いて正社員になろうなんて、気配りが足りないな」  
「...」  
「あっ、ところで、君も無期転換が可能だから」  
「別に、そういうつもりでは...」  
「遠慮をしていると、みんなBに持っていくよ」  
「...」  
「Cの気持ちを代弁してもいいんだけど...」  
「どういうことですか？」  
「君がしたことと同じことを、俺が君の代わりにD人事部長に...」  
Cは一瞬にして背筋がこわばった。  
「別に俺は何とも思っていない」  
「...」  
「じゃあ、俺に一任ということで」  
A課長は終始一方的に喋って、一方的に話を締めくくった。Cは、自分が

大きな間違いをしたのではないかと、気をもんでいた。  
「Cから抗議がありまして...」  
「C...?」  
「部長への密告者...」  
「...相変わらず、品が無いね」  
「その、品が無い判断が招いた問題です」  
「何?それ?」  
「CはBの先輩です」  
「それが?」  
「Cを差し置いて、Bを正社員にするのは、いささか公平性に欠けるかと」  
「お前の口から、公平性、とは、公平性が聞いてあきれろ」  
「部長、ごまかしてもダメですよ」  
「何もごまかさないよ」  
「やっぱり先輩が先でしょう」  
「え、そうなの。いつからうちの人事制度は年功制になったのかね?」  
「人事制度、って...」  
「契約社員から正社員にするのに、年次順なんてルールはどこにもないよ」  
「でも、年上を立てるのは...」  
「Bの方が年上でしょ」  
「ですから、勤続年数...」  
「あのね、もう少し勉強してからおいで」  
「...チツ...」  
「何?いまの?」  
「い、いえ...何でも...」  
「まあ、いいや。でも、何か引っかかるよね」  
「そうですよね、そうですよね」  
「無期転換と正社員と一緒に考えるべきではない、か...」  
「そうです、そうです。正社員なんて、百年早い!」  
「お前、Bがそんなに嫌いなのか?」  
「い、いや、まあ、私も人間ですし」  
「それ、どういう意味?」  
「...」  
「この件も含めて、正式には改めて公表するけど、その前に、Bにはゴメン、っていって」  
「承知しました!!!」  
Bはいつもと変わらず、書類の束を抱えてバタバタしている。その隣で、やはりCはマイペースで仕事をしている。BもCも、2人そろって無期転換権を行使したが、CはBに対して、まだ後ろめたい気持ちを抱えていた。  
「私に変なこと言わなければ...」  
「いいんだって。無期になったし...」  
でもCの思いは、単純にそれだけではなかった。今回の件で、自分の正社員への道も遠のいてしまったことにも、自業自得と落胆していた。  
このBとCの職場では、新たにE課長が上司として配属された。そして、「正社員...」をダシにBをこき使っていたA課長は、人事部に異動した。人事制度を勉強し直すため、D部長の直属の部下になった。

当事者の真意を読み取り、問題に対する認識のギャップを埋め、話をつなく  
オフィスハラダの  
「社外相談窓口」

<https://officeharada.org/helpline/>

オフィスハラダが運営するハラスメント相談窓口は、開設以来十数年、年間千件を超える相談対応実績があります。ご相談内容は、ハラスメントに限らず、多方面のテーマにまたがる多岐に渡る内容ですが、いずれのご相談にも一貫して変わらない対応は、「問題の社内的解決を第一に考えたアドバイスに徹している」ということです。

労使の対立関係を前面に押し出さず、いかにすれば平穏迅速に、問題の収束を図ることができるか、この点に最もエネルギーを注ぎます。なぜならば、問題の社内的な解決は、労使双方にとって、物心両面にわたる負担とストレスを最小限に抑える方法であり、最も望ましいものだからです。

この相談窓口を御社の社外相談窓口としてご活用ください。詳しくはウェブで。携帯からは右のQRコードをご覧ください。



必要な時に、必要なサポートを、必要なだけ。これがオフィスハラダの  
「相談顧問」

<https://officeharada.org/consulting/>

人事・労務に関するお悩み・疑問をスッキリ解消します。

労務管理の改善提案をします  
就業規則などの諸規程の作成・見直しをサポートします。

トラブルの未然防止を図ります。  
万が一の問題発生時には、平穏迅速な解決を促進します。

「今すぐ相談したい!」... 下記 URL  
<https://officeharada.org/consulting/contact/>

からすぐにご相談頂けます。1か月「相談顧問」を無料でお試しください。携帯からは右のQRコードをご覧ください。



「人事労務のリスク管理メモ」

記事内容についてのご意見・ご質問は  
e-mail : [info@officeharada.org](mailto:info@officeharada.org)  
TEL : 050-3301-6118  
FAX : 050-3730-4575  
定期購読(無料です!)はお気軽に...  
詳細は <https://officeharada.org/nl/>  
バックナンバーも掲載中! ご覧下さい

発行: 社会保険労務士オフィスハラダ